

ELVs2008 へのアプローチ (シーズンを前にしてルール改正の研究と対策)

この度の ELVs2008 はラグビー200年の歴史の中でも1960~1970年にかけて試みられた改革に次ぐ画期的なものです。その試みが南半球ですでに実施されていますが、北半球でも手さぐりの状態でシーズンをむかえようとしています。南半球のゲームのDVDを参考にしてゲームの変化や傾向をさぐり、対策のヒントを抽出してみたいと思います。ELVsに係わる数編のコラムも参考資料として役立つことと思います。

ゲームがどれだけ顕著に easier になり simpler になったかというところではありません。レフリーは神経質になりボールの停滞を防ぐために笛が速すぎたり、無用と思われるプレーヤーの質問も繰り返えされています。以前同様観衆は激しいプレーを喜びいつものように興奮しています。南アが数年前から手がけていたのは一体何だったのか期待外れです。しかし、1960~70年代の先の改革もふりかえてみるとRFUが意図し立案しルールを敷いた改革も完全に目的が達成されたわけではありませんでした。コーチング先行時代といわれるように、The Guide for Coachesの出版をはじめハンドブックの改定出版並びに教科書BEEETER RUGBYの発行のもとに、指導者への方向づけと指示によって強力に進められましたが、グローバルにはPOWERの時代を脱することができませんでした。RFU100周年へむけて、ラグビー人口の増加とグローバル化をもとに、プロ化も許容する大改革の成して、オープンプレーの継続とスピーディで流動的な面白いラグビーを目指したものでした。

スクラムとラインアウトは再開プレーとして時間の浪費のないことが第一に考えられ、スクラムは compact で comfortable をモットーに両プロップの内側の肩をフッカーの脇の下につけるように身体を寄せてバインドし、外側の足の位置を内側の足の位置より前とすることによって押すよりプロップ(柱)の働きを明確にしました。インサイドプロップは真っ直ぐ他の全てのプレーヤーの押す方向はフッカーの頭の先に集中するように足の位置をとるようにした。push より shove の感覚でのボールの取り合いです。

ラインアウトは人数を双方同じに整理し、高さで勝負することが唯一の方法として lift も認められることになりました。

ラックとモールが継続のためのプレーとして導入されました。

それまで長い歴史の中で組打ち状態として行われてきたルーススクラムや古い意味内容のモール(雑然集団)を整理し定義づけ、ルールに基づいたプレーとして導入されました。ルーススクラムという言葉を使うなどという指示は画期的なものでした。

しかし改正以後の経過をたどると十分な成果はみられませんでした。

スクラムは押し勝つことが有利であるという考えがそのままにプレーに現れたままで、ラックは立って行われていたものが、ボール上に横たわってボールを確保する意図が強く残り、ボールが停滞することがそれほど少なくなりませんでした。

モールは不定型のままずると前進するケースが多く、防御側や観客にとってもどかしいだけのプレーに変容しただけでした。

ラインアウトは人数が少なくなっただけダミー行為で交わすケースが多くなりかえって時間の浪費と混乱がみられました。

スポーツ競技では、「勝つ」ために全力を尽くす自然な流れの中、競技の本来の楽しさを離れて有利性だけを追求するために、志向されるべきものが疎外されることがあります。勝てば官軍という言葉がありますが、勝った方が一般的に正当視されます。強いものが勝ち残り存続していくのが人間社会の現実であり常識で、スポーツ界でも常道です。改革の主旨が否定も修正もされないままに現実のまま今日に至っているのです。

さて、ここで、当時の日本の実に敏感で積極的な対応について振り返っておきましょう。協会の強化委員会と日本代表チーム結成強化の動きが、関東の大西鐵之祐、金野滋、関西の星名泰、川越藤一郎氏等によって進められました。諸氏等をリーダーとするグループが結成され情報をキャッチし研究を進め、資料の翻訳出版がおこなわれました。小生もツアコミッティー委員としてグループの一員に加えて頂き作業の一端を受け持たせていただいたことを幸いであったと感謝していますが、当時のグループのエネルギーは膨大ですばらしいものでした。

この度の改革はIRBが数年に及ぶ検討の末に実施したもので、ミレニアム見直しを経て「ルーリング先行」時代を象徴するものです。先に次のように宣言しました。

We are looking at the game in a new light with the idea of making it simpler and easier to play and referee, and ensure Rugby is understood and enjoyed by the increasing number of spectators that are being attracted to the game.

プレーヤー、レフリーだけでなく、観衆も含めて全ての人に easier で simpler であるように

ルール改正が検討され、世界の各地でローカルルールで試験的におこなわれました。

スクラムオフサイドラインが最後尾の線より 5m 後となり、ボール獲得チームの反対側ハーフの位置が equal になりました。スクラムに時間がかかり、ボールを獲得展開した側が後退するという不燃焼現象が少なくなりました。

ラインアウト人数多くなり、高さで勝負することがより多くの位置から可能になり、獲得ボールは直バックスへ展開し simple に再開するケースが多くなりました。

モール引き倒しはごつごつダラダラのFWプレーをなくし展開を促進し、防御のないモールが equal 状態になり、継続プレーとしての機能を発揮するのが楽しみです。

等々、改正ルールに焦点を絞って見ますと南半球のゲームからプレーヤーとレフリーの意識と研究による変化がいくつか見られます。

どうなっているのか分からなかった unplayable が結果ではなく入口原因判断で笛が吹かれ、ボール展開を阻害することは全面的に反則とする。その結果だけではないが、フリーキックがおおくなり、プレーヤーも停滞を避けで即攻が常態となった。プレーヤーのボール放しが明確になった。身体から離れた位置への手放しによりプレーが継続している。

小さいパントキックによりタックルされるケースを避け、パスの効果も目指している。

スクラムの押し短く、球出しが早くなった。タックル後ボールを放さないのか放すのを妨げたのか問う笛が見られる。

結果的には、運動量が増えたことは感じられるが、目指されていたことの中で変わったのはこの程度のもではなかったということです。さらに easier に simpler なり、より楽しくする努力が必要で、その責任はプレーヤー、レフリー、観客のすべて人々の意識の問題です。

ラグビーは equal condition のもとに、safety 第一に open play を心がけて楽しむ running handling game です。POSITION, POSSESSION, PACE を工夫し、GOFORWARD, SUPPORT CPNTINUNITY, PRESSURE を心がけて相手に勝つことを楽しむ競技です。

オリンピック・サッカーワールドカップに次ぐ大イベント言われるラグビーワールドカップを頂点に、世界中のより多くの人々にラグビーが愛され親しまれることを願う IRB の努力に敬意を払い、日本のラグビーも後進性を排して、ラグビー人口増加から日本ラグビー再生・ブーム復活のためにこのルール改正を絶好の好機と受け止めて、改正の主旨を弁え方向性を理解してラグビーを楽しむことが肝要であると思います。

2008. 08. 24
西川 義行